



時の雲 文学少女



cocoratte

時は平安時代。東国。

菅原家の娘には、姉妹がいた。姉は「不思議ちゃん」。妹は「文学少女」。

ある日、姉がいった。「ねえ、聞いて！ 今日夢の中に猫ちゃんが出てきて・・・。」

「おのれは侍従の大納言の御むすめのかくなりたるなり」と。

そなたとは前世で縁あった仲であるゆえに、こうして猫の姿で出てまいりました。

「文学少女」は思った。なるほど。たしかに、どこことなく気品のある顔立ちではないか。

とそんな風に、姉妹で可愛がっていた猫も、家の火事とともに、亡くなってしまったのである。

「文学少女」は物語を好んだ。彼女が、義母から聞いた話は「源氏物語」。当時のベストセラーである。

東国は一説によると、豊かな土地だったともいわれているが、更科日記を読む限りでは、荒れていた田舎だったらしい。

もっとも今の横浜にある、金沢文庫（かねさわぶんこ）といった武家の私設図書館なども後には整備されていく。

これはのちに「徒然草」を書いた兼好も訪れているのである。

「文学少女」は誓った。なんとしても、源氏物語が読みたい。と、こうして、木彫りの仏像を彫り、祈りを捧げた。その仏像は、父の受領（高級役人：今の知事みたいなもの）の職が終わり、京に、引っ越すときに、家のかたわらに、ぽつんと立っていた。「文学少女」は別れを惜しんだ。祈りを捧げた仏像との別れを。喜びと悲しみが彼女にやってくることを。

参考及び引用文献（日本人なら知っておきたい日本文学:蛇蔵、海野凧子著、地域学のすすめ:森 浩一著）